館長コラム

竹の秋

滝沢　具幸

伊那谷の初夏。里山には緑が萌え、森は樹々が盛り上がるような生き生きとした活力に満ち溢れている。その中に黄色く色づいた竹林がひと叢ふた叢とあちこちに見える。今はまさに「竹の秋」の季である。竹林の下を歩くと、ひらひらと音も無く竹落葉が散る。「竹の秋」、「竹落葉」は季語となっている。竹の葉が再生するときである。

近頃伊那谷の竹林がずいぶん増えた気がする。里山や山際の畑の手入れが行き届かず、竹がどんどん進出して困るという話をよく聞く。私の実家周辺の竹林も林へと入り込んできた。今や雑木林は竹によって占領されようとしているので、今は竹の切り時ではないが、間引き切りをすることにした。「木六、竹八」と昔から言われ、竹の切り時は8月（陰暦）が良く、この頃は性が盛んな時であると言う。

竹は私たちには極めて身近な植物であり古来より暮らしの中で様々に利用されてきた。しかし現在はその利用が少なくなり、竹は無用の長物となりつつある。

過日、私の大学の民族資料室で竹細工のコレクションを見せてもらった。人々が日常に使ってきた手作りの品であるが、竹からこれ程多種多様な道具が作られたのかと改めて驚いた。竹を丸のまま利用した物干し竿、釣り竿、自在鉤、竹馬や水筒、尺八や笙。竹を割ったり削ったりして作った物差しや竹ベラ、竹櫛、熊手や弓など。また細かく割って編んだ魚籠や背負籠、笊の色々。そして和傘や提灯、扇子や団扇などなど・・・。美しく編み上げられた竹細工は誠に見事な手仕事と言える。手作りの味わい深さが心に沁みる。柳宗悦が無名の工人の手によって生み出された生活具を「民芸」として提唱したこともうなずける。しかし此処にあるのはもっと素朴で身近な親近感をもった道具たちであると思った。

人は手を使って自然へ働きかけ、「モノ」を生み出し利用してきた。作り出されたモノは人間の身体の延長であり、手であり心であると思う。しかし技術文明が発展し、モノ作りは複雑化し、モノはヒトから離れ、無機質化してきたように思う。そしてヒトの手になじみ、身体に合った手作りの道具がうち捨てられていることは、誠に残念に思う。

いま、竹林に入り、爽やかな葉ずれの音を聞きながら竹を切っている。竹取翁ではないが、美しく真っすぐに伸びた青き竹の中に、ふと神聖なるものが宿っているという想いを抱いたのである。

インフォメーション　⑥→⑧月

◉美術博物館＞

お問い合わせ：0265-22-8118

◎企画展および特別陳列

特別陳列	日夏耿之介の眼Ⅲ －谷中安規の版画の世界－	6/20(土) → 7/20(月)
企画展	こんなの見つけた！ぼくのわたしの里山コレクション	7/25(土) → 10/4(日)
	長野県在住日展日本画作家飯田展	7/25(土) → 8/23(日)
特別陳列	天龍峡 －景勝と文化－	8/29(土) → 10/4(日)

◎平常展示

20世紀抽象絵画の夢	6/11(木) → 7/12(日)
峡谷の花2 －菱田春草と飯田の美術－	6/20(土) → 7/20(月)
峡谷の花3 －菱田春草と飯田の美術－	7/25(土) → 8/23(日)

◎プラネタリウム

夏の番組「ヤッターマン」	6/13(土) → 9/13(日)

◎講演会

地震を知って震災に備える 講師：尾池和夫 氏（元京都大学総長）	6/14(日) 14:00～
ゲッチョ先生の里山コレクション 講師：盛口満 氏（エッセイスト・沖縄大学准教授）	8/30(日) 10:30～

◎自然講座

絶滅危惧種ダルマガエル 講師：下山良平 氏（理学博士）	6/12(金) 19:00～
活断層から見た山と盆地の履歴 講師：松島信幸 氏（当館顧問）	6/20(土) 13:30～
エネルギーの地産地消で循環型社会を 講師：原亮弘 氏（おひさま進歩エネルギー株式会社）	7/16(木) 19:00～
天然の冷蔵庫、風穴を地域遺産に 講師：片桐一樹 氏（伊那谷自然友の会）	8/20(木) 19:00～
里山コレクション 講師：安田守 氏（生きもの写真家）・四方圭一郎（当館学芸員）	8/27(木) 19:00～

◎美博文化講座

飯田藩主堀候の事績 講師：鈴川博 氏（当館客員研究員）	6/13(土) 13:30～
ホトケさまのファンション その1 －如来・菩薩－ 講師：織田顕行（当館学芸員）	6/23(火) 19:00～
環境民俗学の視界 講師：野本寛一 氏（当館顧問）	7/18(土) 13:30～
柳田家を支えた町民と百姓 講師：伊坪達郎 氏（当館評議員）	7/26(日) 13:30～
遠山谷北部の民俗報告会 講師：野本寛一 氏（当館顧問）	8/23(日) 13:30～
ホトケさまのファンション その2 －明王・天－ 講師：織田顕行（当館学芸員）	8/25(火) 19:00～

◎美博特別講座

日本絵画の空間 －絵巻と琳派から－ 講師：滝沢具幸（当館館長）	6/21(日) 13:30～
第2講（演題未定） 講師：中島純司 氏（仏教大学教授）	8/22(土) 13:30～

◎子ども博物館くらぶ

宇宙をのぞこう －親子で学ぶ天文講座－

・日食の観察会	7/22(水) 9:00～
・流れ星と夏の星	7/26(日) 15:00～

◎美博まつり	8/1(土)・2(日)
◆臨時休館日	6/2(火)-10(水)・7/24(金)

◉上郷考古博物館＞

お問い合わせ：0265-53-3755

◎ぎやまん工房 －とんぼ玉づくり－	6/14(日)
◎玉造部の会 －勾玉づくり－	7/12(日)
◎土器作り教室 －作成－	6/27(土)・28(日)

テラス ◉飯田市美術博物館ニュース◉ 2009 _ Vol. 082

◉発行日／2009年6月10日　◉印刷／龍共印刷株式会社　◉発行者／飯田市美術博物館　〒395-0034　長野県飯田市追手町2-655-7　TEL 0265-22-8118　URL http://www.iida-museum.org/

© 2009 Iida City Museum　※本書を無断で複製・転載することを禁じます。

2009 _ Vol. 082

テラス

◉飯田市美術博物館ニュース◉

Iida City Museum News "TERRACE" Vol.082
http://www.iida-museum.org/

iida city museum

特別陳列

日夏耿之介の眼　谷中安則の版画世界　①　6/20(土) → 7/20(月)

いちど見たら忘れ難い強烈なインパクトを放つ小さな版画。

この作家は、ドロドロと鬱屈した感情をハガキ大の小さな版画にぶつけようとしました。なぜ版画でなければならなかったのでしょうか。

大正から昭和にかけて幻想的で怪異な作風の版画を残した谷中安規（1897-1946）は、大正13年（1924）頃に第一書房を経営していた長谷川巳之吉を通じて日夏耿之介と知り合いました。日夏耿之介（1890-1971）は、飯田町（現在の飯田市知久町）に生まれ、飯田市名誉市民にも選ばれた詩人・英文学者です。

二人の交流の期間はそれほど長くなかったようですが、その間、食うや食わずの生活を続けてきた谷中は、日夏の主宰する雑誌の挿絵を手がけたり、日夏に自分の作品を贈ったりしました。それらの作品は、谷中のその後の創作活動の根底に在り続けた「エロ・グロ・ナンセンス」流行の風潮を色濃く反映したものが多く、なかでも一連の「妄想」シリーズは初期の代表作といえるものです。

谷中にとって日夏との出会いは、版画家としての自覚を強く促すものでした。

この展覧会では、本館の所蔵する日夏耿之介コレクションから、谷中安規の版画（「妄想」シリーズ19点など）を中心に、谷中が日夏に贈った手紙や絵本、版木、谷中が挿絵を手がけた雑誌などおよそ40点、写真パネルなども併せて展示いたします。

日夏耿之介との出会いは、谷中の創作活動にどのような影響を与えていったのでしょうか。

（織田）

①「妄想F」　谷中安規　大正14年（1925）頃　本館蔵

①「手作り絵入り冊子」　谷中安規
大正15年（1962）　本館蔵

特別陳列

天龍峡－神仙境と文雅の歩み　②　8/29(土) → 10/4(日)

諏訪湖から流れ出す大河天龍川の中流域、流れが山間地へと入る狭窄部に名勝天龍峡はあります。上昇した地盤に流路が刻まれたために深い谷が形成され、険しい渓谷の景観が展開します。かつては、奇岩にアカマツが張りついた壮麗な風景が見られ、山水画のような風情を目前にすることができました。

弘化4年（1847）、昌平黌で教鞭を執った儒学者・阪谷朗廬が、古賀侗庵塾の学友・丸山仲粛の仲立ちで川路の医家・関島松泉を訪ね、その折に、峡谷の景勝地を天龍川にちなんで天龍峡と名付けました。漢文で綴られた『天龍峡記』には、朗廬が訪れた時の天龍峡が活き活きと描写されています。

命名以降、天龍峡は文人墨客が訪れる名勝となり、飯田地方の文化の一端を担っていくことになります。明治初期には、地元の気運も高まり、天龍峡を広く世間に知らしめようとする運動も盛んになり、これに伴って、訪れる人々も増えていきました。

明治15年（1882）には近代書の大家・日下部鳴鶴が来峡し、景観に神仙境のイメージを重ねて関島松泉とともに「天龍峡十勝」を選定しています。また昭和にはいると「天龍下れば」・「龍峡小唄」などの新民謡が生まれ天龍峡の名は全国に知れ渡っていきました。

天龍峡には、人のおとずれと共に様々な文化が去来し、様々な文化が培われました。今回の特別陳列では、文人文化や陶芸など天龍峡に花開いた文化の一端をご紹介し、また映像・写真などによってかつての天龍峡の景観を再現していきます。

（槇村）

②「白瓷華瓶」　中村雅臣
昭和42年（1967）頃　本館蔵（新収蔵品）

②「信濃天龍峡図」　安藤耕斎
昭和9年（1934）　個人蔵

②「天龍峡」　藤本四八 撮影　昭和32年（1957）　本館蔵

企画展

こんなの見つけた！ ぼくのわたしの里山コレクション　③　7/25(土) → 10/4(日)

子どもたちと山を歩くと、駆けたり転んだりしながら、いろいろな「モノ」を見つけてきます。石を拾い、ドングリを拾い、羽を拾い、ホネを見つけます。チョウを追いかけ、花を摘み、鳥の声に耳を傾けます。

僕たち少し変わった大人も、立ち止まったりしゃがみ込んだりしながら、やはりいろいろな「モノ」を見つけます。緑色岩だったり、フモトミズナラのドングリだったり、カケスの羽だったり、タヌキの頭骨だったりします。網を片手にツマキチョウを追いかけ、ウリカエデの花を撮り、オオルリの声に耳を澄ましします。

この企画展では、そんな散歩の途中に出会った「モノ」を集めてみました。多くのモノには名前があり、くらしがあり、履歴があります。また発見にはエピソードがあり、それには喜びや驚きが付随します。前者は「モノ」自身が持つ特徴、後者は発見者である「ヒト」が持つ感情です。

展覧会の会場では、モノの特徴と発見者の感情の両面を軸に、身近な自然である里山をコレクションしてみたいと思います。一つ一つのモノは小さかったり、地味だったり、どこにでもあったりしますが、深くまた広く掘り下げることで、「モノ」を10倍楽しむ方法を紹介します。

楽しく接するためのワークショップも多数企画しています。クイズラリーや写真紙芝居、拾いモノ自慢大会、糸つむぎやアクセサリー作りなどなど・・・。

8月30日（日）の講演会では、拾いものコレクションの第一人者、エッセイストでイラストレーター、沖縄大学准教授のゲッチョ先生こと盛口満さんをお迎えします。モノ集めのおもしろさに引き込まれること間違いなし！

（四方）

③ 山野で見つかるマユ
左上:ヤママユ　右上:クスサン　左下:ウスタビガ

③ トックリバチ類の巣

③ ウマノオバチ

表紙 ／ ヤママユの幼虫

晩夏にあらわれるヤママユは、大きさが大人の手のひらほどもある蛾で、本州では最大級のサイズを誇ります。伊那谷にも普通に棲息し、山野でも見かける黄緑色のマユからは美しい光沢を持った絹糸を紡ぐことができます。そのため長野県では安曇野あたりで盛んに飼育され、天蚕（てんさん）と呼ばれてきました。

幼虫は巨大なイモムシで、透明感のあるきれいな緑色をしています。この色は逆光で透かした新緑の葉の色にそっくりで、初夏の陽射しの下で外敵から身を隠すのに役立っています。

テラス。飯田美術博物館ニュース。2009 — Vol. 082